

# 社会臨床の視界

## (1) 歴史のなかの臨床課題

中村 正 (立命館大学)

### ここで書いていきたいこと

対人援助は臨床的援助を含む広い意味で使われている。何らかの vulnerability (脆弱性) に関わることになるが、単なる個人の適応や同化という意味ではなく、well-being や QOL に力点が置かれる。その人のもつ潜在的な可能性や本来持っている力 strength が十分に周囲の環境、状況そして関係性のなかで活かされていないことを意識して、それをなんとかしていくということだと考える。それはすぐれて社会的行為としてある。それが援助行動 helping behavior であり、その担い手として対人援助専門職 helping profession があり、多職種が連携して援助共同体 helping community をつくる。治療共同体 therapeutic community はその一類型である。この潜在性を開花させるための〈社会〉の責任について、それを制度デザインやコミュニケーション基盤の構築へと向かわせることを社会臨床の視点は重視する。これは権利擁護を志向する対人援助専門職 advocacy-oriented professional である。そこには固有の倫理規範 ethics がある。

また、対人援助はその個別性を記していくことが大切だと思う。しかし、個別性を大切にすることとは、その個人にだけ適応や同化を強いることではない。そしてまた、狭い意味での客観化された援助 - 被援助という枠に収めることでもない。環境、

状況、関係性、相互作用、文脈を浮かび上がらせることをとおして、潜在化している人の可能性を拓く多様な回路を提示することが重要となる。マクロに言えば、社会性ということになる。社会は個人間の相互作用を連続体なので、臨床性を旋回軸にして社会性と個別性のかかわりあいがか錯綜して表現される。そうだと考えれば、臨床の諸課題はその周囲の環境等に「淀み」ができていくということの表象となり、関係性の変容や相互作用の再構成への示唆となる。ミクロな相互作用をとおしてマクロな構造的問題を見いだすことが権利擁護を志向する援助専門職の実践では重視される。臨床性が生成してくるその場において現出する問題を社会臨床として包括的に捕捉すべき主題が現代社会には多いのではないかとも思っている。社会病理学を専門にする者が、人々の生きづらさに直面し、それを臨床社会学的な視点から読み解きながら、個人や家族への対人援助の実践に取り組み、そのことから社会臨床という視点に至る過程と諸断面のこれまでの経過と現在のもの見方について、備忘録風に記していくこととしたい。

### 視界を広げる - オーストラリアでのこと

2003年から2004年にかけてシドニー大学で客員をしていた。自然の豊かなオーストラリアは、眩い太陽、コバルトブルーの海、赤茶けた大地が織りなす彩りのある昼

と、それがゆえに感じる漆黒の暗闇と野性の静寂と恐れとでもいえる畏敬の念を醸し出す夜の対比が印象的である。この間を埋める自然との共生感覚を a way of life、つまり文化として営んでいたアボリジニは、オーストラリア大陸の陰翳を象っているように感じる。多様に繰り広げられるアボリジニの各種の表象がなければ、オーストラリアの深さと広さを捕捉できないのではないかと思うほど、その音楽、色彩、知恵、自然観、宗教など、総じてスピリチュアリティは豊かである。

アボリジニの置かれた社会的現実はいかに厳しい。期せずしてシドニーでアボリジニの日常の現実を映し出す事件に遭遇した。後に The Redfern Aboriginal Riot と呼ばれることになるアボリジニと警察官との暴力的な衝突事件である。2004年2月17日のことだった。シドニーの中心部にあるレッドファム駅の周辺にはアボリジニが多く住むコミュニティがある。警察の過剰な介入である追跡がもとになり、バイクに乗った17歳のアボリジニ少年がスピードの出し過ぎで運転操作を誤り、激突して亡くなった。その死を契機にして、かねてよりアボリジニ社会を過剰に監視する警察への不満が爆発した。シドニー中心部で警察隊とアボリジニが対峙して、石や煉瓦や火炎瓶などを投げつけるという事件となり、収束をみるまでに、夜半にかけての長い時間を要することとなった。その間 レッドファム駅は封鎖され、騒然となった様子をテレビが伝えていた。

この背景には、高い自殺率（アボリジニはオーストラリア社会平均の2倍の自殺率を示す。地域によっては4倍。年齢層では

青年男子に多い）収監されているアボリジニの高い比率と刑務所での死亡が多いこと、アルコールと薬物依存の多さ、平均寿命が白人にくらべて20年ほど短いこと、およそ45歳から高齢者向けのケアを受けることができることなど、あげればきりのないアボリジニの現実がある。これら精神衛生、社会生活、心理臨床にかかわる諸問題は、明らかに先住民への暴力、差別、虐待の歴史が反映された社会病理現象の一環である。

さらに、現代社会では虐待ともいえるが、その典型としてアボリジニ親子分離政策があった。これはいわゆる白豪主義政策 White Australian Policy の典型である。英語やキリスト教など白人社会に同化させるための教育を施す収容所にアボリジニの子どもたちが送られた。強制移住であり、有無を言わせない暴力そのものの政策であった。2004年のオリンピック選手であるフリーマンの祖母はこの親子隔離政策の犠牲者の一人であった。この問題を扱った小説と映画がある。西オーストラリア州に住む犠牲者の家族の実話をもとにした『Rabbit-Proof Fence』という映画である（『裸足の1500マイル』という邦題で観ることができる）。アボリジニと白人の間に生まれた混血の少女3人が家族から引き離された。母親に会いたいという思いは強く、彼女たちは収容所を脱出する。1500マイル（2400キロ）をウサギよけのフェンス沿いに歩き続ける。監督はオーストラリア出身のフィリップ・ノイス。ラストには、モデルになった女性たちも登場するドキュメントタッチの映画だ。この白豪主義の政策は1910年から1971年まで続いていた。遠い過去のことではない。「失われた世代」

stolen generation と呼ばれる親子強制隔離政策の犠牲や白人文化への融合政策、根強い人種差別など、負の歴史を傷あととしてもつオーストラリア社会にしばらく暮らしてみても、この問題の深さを実感した。

この政策も含めて、先住民と白人植民者の間の確執は大きく、先にあげたような数々の社会病理現象としてなお傷跡を残している。文化的トラウマ、トラウマの世代間連鎖などとも呼ばれることもある。自殺、殺人、非行、依存症など心理臨床の重要な対象となる問題の山積するアボリジニ社会は、トラウマの世代間連鎖をとおして、社会性を色濃く帯びた社会臨床的なニーズを数多く有しているといえる。アボリジニ問題は、オーストラリア社会にとっての原罪のようでもある。もちろん、多文化社会づくりの駆動力ともなり、競争と戦争ではない和解と平和のための国家のあり方を示す試金石ともなりうる点も看過できない。

暴力と虐待の歴史の結果の民族への負荷は、その社会においては精神衛生と心理臨床の課題として現出し、援助は個人に焦点をあてざるを得ない。それを、アボリジニが多くすむ地域としてみると、剥奪された地域ともいえるので、個人の問題だけではない社会性あるテーマとして確定していくことが重要だろう。そのためにも社会がその関係性の修復に取り組むことも重視されるべきだ。同化に対比していえば異化という側面である。この両者を視野におさめるアプローチが社会臨床といういい方にこめた意味である。

しかし、社会性があるとはいっても、臨床性をもつ援助課題として把握されるべき面もある。かねてより関心をもっていたア

プローチがあり、それを社会臨床の視点から会得したいと思って赴いたオーストラリアである。マイケル・ホワイト Michael White を創始とするナラティブ・セラピー Narrative Therapy あるいはナラティブ・アプローチ Narrative Approach のベースとなっている南オーストラリア州のアデレードにあるダルピッチセンターに出向き、セラピーの研修を受け、加害者・虐待者への脱暴力にむかうための具体的なセラピーの手法を学んだ。ナラティブ・セラピーは暴力や虐待など社会性のあるトラウマを対象にした実践をおこなうことが多く、南オーストラリア州ではアボリジニ社会で活躍するコミュニティセラピストの存在の大きさを知ることができた。場に臨むことで見えてきたナラティブ・セラピーの社会臨床的なアプローチであった。(続く)

なかむら ただし

(専攻 社会臨床論、社会病理学、臨床社会学)